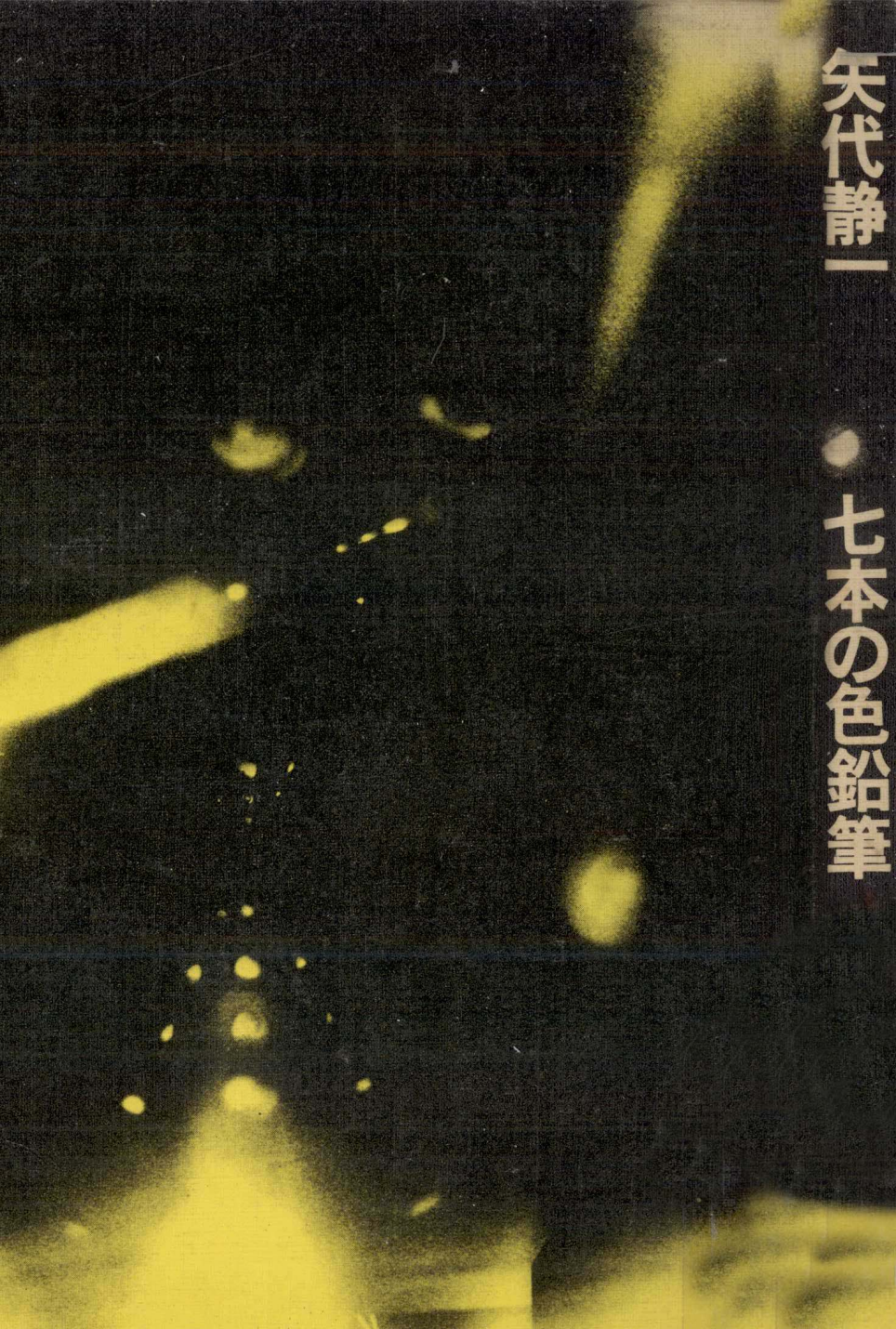

七本の色鉛筆

矢代静一

書下ろし新潮劇場

七本の色鉛筆

矢代静一

新潮社

書下ろし新潮劇場

矢代静一

七本の色鉛筆

昭和47年11月10日印刷／昭和47年11月15日発行
発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808
印刷■大日本印刷株式会社／製本■共同製本
©1972, Seiichi Yashiro, Printed in Japan
乱丁、落丁本はお取替えいたします
定価570円

七本の色鉛筆　三幕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

■登場人物

（喜多家の人々）

父		五十五歳	大学教授
恵子	（長女）	三十歳	幼稚園の先生、のちに人妻
菊	（次女）	二十八歳	独身、雑誌編集者
みな子	（三女）	二十六歳	人妻、オデン屋経営
まり	（四女）	二十四歳	人妻
明子	（五女）	二十二歳	独身
文代	（六女）	二十歳	独身、ＯＬ
巴絵	（七女）	二十歳	独身、のちに修道尼
みちる	（母）	三十歳	

＊

田所	四十歳	貿易商
みな子の夫	二十歳	無職
宮島	三十五歳	酒屋、のちに恵子の夫（フランス人）
女子修道院院長		
少女時代の菊		

この劇は、昭和二十年夏の日本の敗戦すこし前から、現在（上演される年）にまたがる。
登場人物の年齢は、この劇の中で、もっとも多くの時間を占めている一時期に於ける年齢である。
もっとも、母だけは敗戦前後の年齢にした。
母の役は、文代役の女優が兼ねてもよろしい、瓜二つだし、心の動きも似通っているのだから。

第一幕

1

菊登場

菊　私はこの劇の案内人で、登場人物でもあります。
明るいさわやかな後味の物語にしたいと思っております。
ということは、明るくさわやかなものを私が求めているからでしょう。
もっと突っこんで言えば、私自身の心が暗くよどんでいるせいかも知れません。
劇は、母の死から始まります。

いまから八年前のことです。
それで、私も、嬉しいことに、いまは八つ若いわけです。むろん、ほかの登場人物たちも。

片隅はナイトクラブで、中年の田所と、まだ少女っぽさの残っている文代が踊っている。曲は「トゥナイト」のようなもの。
文代の踊りは鮮やかであるが、田所のそれは稚拙で、当人もそれを知っているので、わざと気取って、道化た振りをして、ごまかしている。

文代　倖だわァ、最高に、社長さん！
田所　僕としては、いまだに信じられんね。
文代　え、なにが？
田所　君のような、ピチピチしたお嬢さんが、僕如き中年男を……。
文代　運命ってたしかにあるんだなァ。寛子尋ねて、会社行ったんだけどォ、あの日寛子会社お休みで、それで社長さんが気の毒がってェ、お茶にさそってく

れた。

田所　あんまり、文代ちゃん、君がね、僕の初恋の人に似ていたからさ。

文代　てな月並なことといって、社長さん、いままで、たくさんの女の人を……。

（笑う）大人ってずるいからなァ、でも、いいんだ、それでも、私。

田所　だったら、そろそろ、君の正体を教えてくれてもいいんじゃないかね。君が何者で、どんな境遇の人か、まるで知らんのだぜ。

文代　いいの、あんまりお互いのいろいろなこと知ると、別れるとき、つらくなるもん。だいち、奥さんにわるいわ。

田所　おい、おい。

文代　またァ。いないっていいたいんでしょ。初恋の人が忘れられなくて、いまだに独身か。その手には乗りません。

田所　君の話きいてると、僕と君の物語は、なんだか、妙にロマンティックで、最後は、君が失恋して……。

文代　そう、とぼとぼと、後を一度だって振向かずにあなたと別れて、夕焼の田舎道を、目に涙いっぱいためて、消えて行くの。

田所　そういう古いお話は、もう週刊誌にものっていませんね。

文代立上り、田所に手を差しのべ、握手し、くるりと背を向け、とぼとぼと歩き出す。

田所　早速、ラストシーンの稽古ですか。

文代　（いたずらっぽい目をして）もうかえらなくちゃいけないの、ほんと。母が昨日なくなって、今夜、お通夜なの。

田所　恐るべき子だね、君は。

文代　意地悪、私がそれほど、あなたのことを……。

田所　葬式に顔出したい、これは常識というものなんだよ。君の家どこ？

文代　……田園調布の駅の前の交番できけば分ります。喜多という家。父は大学の先生。

田所　……。（強い衝撃を受ける。二三歩、あとずさりする）

文代　やだァ、社長さんまで、ラストシーンのお稽古してる。（笑う）

田所　踊ろう、……ラストダンスだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

喜多家の一室。戦前に建てた家で、つまり、いまはボロ家といってよい。

巴絵がショパンのロ短調ピアノソナタ「葬送」を弾いている。

文代を除いた喜多家の六人姉妹が集まっている。

父だけ、一人離れてぽつんと。

菊　ピアノを弾いているのは、末娘の巴絵です。

彼女は、うっとりと、自分の指先から生れてくる美しい調べに聞き惚れているようです、母がなくなったことなどまるで忘れて。彼女は、周囲のことなど無視して自分だけの世界に、すぐ閉じこもれる性格をもっています。うらやましい性格です、幼いころから、そうでした。

さて、母は、ちょうど五十歳でなくなりました。ソートン・ワイルダーという人の書いた「我が町」という芝居の台詞を真似ると、こういうことになります。

この人は、つまり、「母は、この家にとついでから三十年間、夏休みもなしに、

日に三度ずつ食事をつくりました。七人の子供を育て、洗濯をし、家の掃除をやりました。それでいて、神経衰弱など起したことはないのです。また、自分が酷使されていると思ったこともありません。或る詩人の言った、『生活するために、生活を愛し、生活を愛するために、生活した』というのに似ています」。(父に近寄る)父です。父に、いま、明るくさわやかな話を望むのは、ちょっと酷というものでしょう、母を頼りきっていた人ですから。しばらくそっとしておいてあげたい。そうしてあげることで、私は親孝行ということになり、つまりは点数をかせげるというわけです。父は大学教授で、フランスの十七世紀あたりの歴史が専門です。ですから、そのころのパリの地図なら目をつぶっても書けるそうです。けれど、フランスにはまだ一度も行ったことはありません。「行く必要はない、いまは残念ながら、二十世紀だ」というのが、父の考えです。(父に)さ、すこしお休みになるといいわ。

菊は父をやさしくいたわりながら、いっしょに退場。

まり　早いものねえ、お母さんがなくなって……もうお七夜。

みな子　初七日だろ。（巴絵に）ちょっと、そんな辛気くさいのやめて、ぱあっと、華やかな奴、弾いておくれよ、モダンジャズかなんか。

巴絵　分ってまんねん。（曲はジャズになる）

恵子　いけないわ、御近所の方がなんだとお思いになるじゃありませんか。

巴絵　分ってまんねん。

まり　（明子に）疲れたでしょ、大丈夫、胸の方？

明子　（思い出して、はっとする。空咳を始める）……。

みな子　あいかわらずうかつな人だねえ。胸の悪い人に、こともあろうに、今日みたいな日に。母さん、肺ガンで死んだんじゃないか。

まり　（反省して、しみじみと）そうだったわねえ。（明子に）あんたも、ほんとに注意しないとね。おばあちゃんも肺病でおなくなりになったことだし……。二度あることは三度あるっていうから、ほんと。

みな子　それそれ、それが、うかつだと言うんだよ。

菊登場

巴絵　どうだった、ズッコケパパ！

菊　……一人にしてくれといって、ふとんの中にもぐってしまったわ、まだ日も暮れていないのに、わざわざ寝巻に着換えて。

恵子　じゃ、あなた、お困りでしょう。お客さま方に、私たち一家のこと紹介するようたのまれたんでしょ。

菊　いいのよ、文代ちゃんだってまだかえって来てないし、それに、一人一人キチンと自己紹介して、さあ、これから始まりますなんていうお芝居はね、このごろはやらないのよ。明日なにがおこるか分らない世の中じゃない。お芝居だって、意外性や飛躍があってしかるべきよ、お芝居は世の中を写す鏡だもの。

恵子　私、そういう投げやりな考え方きらいです。菊さんは、ちょっと、人生に対しても、御自分に対しても、ものうげなところがおありですよ。（観客にていねいにおじぎをして）長女の恵子でございます。小さな子供ってほんとうにかわいらしくて……。このあいだもサンタクロースの話をしたあとで、こんなことがありました。やんちゃな五つの男の子が、もみじのような手をあげて、「先生！」と質問するんです。「先生、世界中にはモーレツにたくさんの子供がいるのに、どうして、あっちこっちにちらばってる子供たちに、いっぺんにプ

レゼントあげられるんだろう」。私、ちょっと困りました。つづけて、「先生、サンタクロースは、雪の夜に、橇に乗ってやってくるんでしょ、でも、雪の降らない国もあるんじゃないかな」。そういえば、去年のクリスマスには東京は雪が降りませんでした。でも、子供は去年のことは忘れているようでした。「そうだ、雪の道ってのは、空の上にのっかってる雲のことだ、雲なら早いからな。でも、先生、どうしたら、雲の上に飛び乗れるんだい」。私、正直に「ごめんなさい、先生にも分らないわ」と申しましたら、その男の子、「なら、分った」というんです。「先生にも分らないんだから、サンタクロースは神様なんだ。神様のことが俺たちに分ったら、ありがたみねえもんなァ」なんて、ませた口をきくんです。申しおくれましたが、私、幼稚園でお子様方を教えさせていただいてます。(再び一礼して席につく)

みな子　それだけ？

恵子　ええ。

みな子　(観客に)こういう人なのよ、恵子姉さんというのは。自分の苦労話なんて絶対人にこぼさない人なんだ。この人はね、私たち六人の妹たちのために、青春を犠牲にした人なのさ。母さんのアシスタントとして、家の中の洗濯や食

事や掃除にかまけて、とうとう、婚期を逸しちゃった。どなたか、いまからでも遅くない、いい人みつけてあげて下さいな。

恵子　ありがとう、みなちゃんのそのあたたかい気持だけでもう充分。（ちょっと、目をうるませる）

みな子　そういってくれると助かるね。現実問題として、恵子姉さんをもらってくれる人、現われそうもないもの。

まり　（うなずいて）そりゃ、そうね。

みな子　まりちゃん、私もうかつだったけど、あんたもうかつだよ。

まり　あら、どうしましょう。でも、でもね、私、昔、お母さまから、とてもいいお話うかがったことあるの。恵子姉さんが小学校二年生のときだっていうから、私が、ええと、まだよちよち歩きのころね。恵子姉さん、きいたんですって。「ね、ママ、みんなが、まりちゃんのことかわいいかわいいっていうけど、私は、一度だって、かわいいって言われたことないわ。どうしてなの」。

みな子　いいんだろうね、大丈夫なんだろうね。ちゃんと、いい線で、話をしめくくってもらえるんだろうね。

まり　そりゃもう、絶対。お母さまはそしたらね、こう説明しました。「ここに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com